

梁啓超のジャーナリズム精神史研究

陳 立 新

I 論文内容の要旨

『梁啓超のジャーナリズム精神史研究』

梁啓超は中国の近代社会から現代社会への過渡期におけるキー・パーソンである。彼は儒家の「経世致用」思想を継承するとともに、未来志向の人格と社会理想とを結合させた新民説を鼓吹する。彼は生涯、ジャーナリズム活動に従事して国民の啓蒙活動に奔走した。

梁は、1898年から1912年までの14年間の亡命生活を日本で送った。変法運動を中心としたジャーナリズム活動を初期とすれば、亡命期は彼のジャーナリズム活動の最盛期であるといえよう。彼が発行してきた十種類の雑誌の中で、最も優れたものとしては『新民叢報』である。これは、横浜での『清議報』を三年間発行した経験及び松本君平の『新聞学』に触発された健全な新聞経営の理念によったものである。『新民叢報』の成功は留学生、知識人の雑誌発行のブームをもたらした。

日本に亡命したことは彼の生涯において重要な転換点である。日本語の学習を通して、積極的に隣国の新しい思想を吸収して、自国では達成不可能なレベルまで到達したのである。『新民説』はまさに彼の日本滞在中の思想的結晶である。政治小説というジャンルの啓蒙機能を生かした『新中国未来記』の発表は、彼の亡命期ジャーナリズム活動の一環として、重要な意味を持っているといえるだろう。

1908年から1909年までの二年間は、梁啓超にとって、言論の冷え込みの時期であった。というのは、光緒帝の急逝によって、政治的突破口が見えてこなかったからだ。しかし、立憲派は国会の請願運動とともに壮大になり、所謂「紳権の伸張」が目に見える形で展開されるようになった。日本で培った憲政、財政の知識を活かし国情に合わせた『国風報』の発行は、その運動を助長して指導的役割を演じた。「辛亥革命の展開は、実に梁啓超のペンに負う力は多かった。」(林語堂, 1936) 梁啓超は新聞万能論さえ唱えた。欧州大戦以後、梁啓超は国権論者から文化立国主義を唱道する社会評論家に転身し、思想の多様化による文化の優位性を保たなければならないという理念を確立した。「思想統一は文明停頓の兆候であると確信する」ということは、晩年を迎える梁啓超のジャーナリズム精神の結晶であるというべきではないか。

梁啓超の雑誌発行の特徴の一つは、時流にマッチした誌名の変化にあらわれている。上海の『時務報』は変法運動に、『清議報』は勤王運動に、『新民叢報』は国家主義の樹立に、『政

論』は予備立憲に、『国風報』は国会請願運動に、『庸言』は政党政治に、『大中華』は外交立国に、『改造』は文化立国に、それぞれの目標を設定して、政府の監督と国民の指導役を自任する。終始鋭い現実批判の精神を失わず、健全な輿論作りを目指して、ジャーナリズム機能を十分発揮したといえよう。

梁のジャーナリズム精神に潜んでいた「中国不亡論」が、実に一貫した彼の対日論でもあることは大いに注目されてよいだろう。梁は、日本の主体的歴史の営みを懸命に否定し、「中国不亡論」が歴史の「法則性」を擁するものであるとみなして、それを日本に認めさせようとした。しかし、日中交渉史を直視すれば、「日本不亡中国、中国必亡；日本亡中国、中国必不亡。」ということが歴史的に証明されているのではなかろうか。

本論では、梁啓超のジャーナリズム活動がどのように歴史と連動したかという点に着眼して、論述を進めた。彼のジャーナリズム精神は、中国の近代化と共に、初期の「器物」中心主義から亡命期の「制度」中心主義へと躍進し、更に「文化」中心主義へ邁進した。

「歴史の動的発展は、理念と現実とのあいだ（に現れて来る）緊張関係をも原動力としていたのである。」（ハーバーマス、1990）。梁啓超が実践してきた調和主義の機能を持つジャーナリズムはまさにその上に成り立っているように思われる。我々は、彼のジャーナリズム精神に潜んだ「主体性と自然性の調和した規範」という日中共通のコンテクストを容易に見出すことが出来る。この共通のコンテクストが日中間の政治対話（国家間マクロ・コミュニケーション）のプラットホームになる可能性は十分ありうる。それ故、筆者は、日本が梁啓超の活躍する舞台を提供したことについて、両国間の近現代交流史において極めて重要な意味を持っていると確信する。

Abstract

Liang Qichao stands as a key person during the transition period from the modern society to the contemporary society in China. He succeeded to the tradition of Confucian practical statesmanship (taking an active interest in public affairs and devoting oneself to study with a view to application to society), and advocated the “XinMinShuo (New Citizen theory)” that united with a new personality and a societal ideal of the intention in the future. He was engaged in the journalism activities through his life and made efforts to the campaign for popular enlightenment.

He came to Japan as a refugee and had lived in exile for 14 years from 1898 to 1912 in Japan. It can be said that the exile period is a season of his journalism activities if the journalism activities that centers on the political reform movement is assumed to be initial.

The most excellent one in ten kinds of magazines that Liang had issued is *New Citizen*

Journal. It was depending on the idea of the healthy newspaper management that was touched off Matsumoto Kunpei's *Journalism Theory* and gained experiences in issuing *The China Discuss* during three years in Yokohama. The success in *New Citizen Journal* brought the boom of the magazines which was issued by Chinese students and intellectuals in Japan.

Exiling to Japan is an important turning point in his life. New thought in the neighboring country was positively absorbed through the study of Japanese, and it reached the level that was not able to be achieved in his home country. 'New citizen theory' was the fruit of his thought during the period of exiling to Japan. The announcement of "Futurity fiction for New China" that made the best use of the enlightenment function of the genre of "political fiction" had unprecedented significance in terms of his exiled journalism activities.

It was time when speech cooling down for Liang Qichao within two years from 1908 to 1909. For Guangxu emperor's sudden death, they could not make any political breakthrough. However, the constitutionalism sect had become grand with the petition movement of the Diet, and came to be developed in shape that so-called "Expansion of gentry rights" was visible. The issue of *Kouk Fong Po* that Liang made best use of the knowledge of constitutionalism and finance what was cultivated in Japan while matched them with Chinese affairs had promoted the movement and performed the post of guidance. "The 1911 Revolution was very largely the result of his powerful pen." (Lin Yutang, 1936) Liang even set forth the versatility theory of the newspaper. He changed over to the magazine sociologist who advocated the principle of a cultural founding a state from the nationalist after Great War, and his idea that the domination of the culture must be kept by the diversification of thought was established. Should not I say that "It is convinced that the thought union is a symptom of the civilization deadlock" is the fruit of the journalism spirit in Liang's later years?

It appears to changing in magazine naming that matches to the current of the times as one of the features of Liang's magazines. *The Chinese Progress* is for political reform movement. *The China Discussion* is for Emperor rehabilitation movement, and *Sein Min Choong Bou* is for establishment of nationalism, *Political Comment* is for preliminary constitutionalism, *Kouk Fong Po* is for the petition movement of the Diet, and *The Justice* is for party politics, *The Great Chung Hwa Magazine* is for founding a state by diplomacy, *Reconstruction* is for founding a state by culture. Each target was set, and they regarded themselves as government supervision and people's guidance posts. It can be said that his spirit of sharp real criticism was not lost from beginning to end, it aimed at healthy public opinion making, and the journalism function was demonstrated enough.

It must be noted that Liang's cherished view on "China shall not perish" in his journalism

spirit lurked consistently his theory towards Japan. Liang was quite emphatic in denying the Japanese independent workings of history, and regarded the view on “China shall not perish” as a history law that he had tried to make Japan admit it. However, if you face up to the modern history of the negotiation between Japan and China, we can come to conclusion that “If Japan does not want to destroy China, China will certainly destroy itself. If Japan wants to destroy China, it would be far from destroying China.” Isn’t it what has already been proven by the history?

In this paper, the comments was advanced aiming the point that how Liang Qichao’s journalism activities had synchronized with the history. We can say that his journalism spirit progressed from an initial “Container” centrism to “System” centrism of his exile period, and went forward on “Culture” centrism with the modernization of China.

“The dynamic development of the history was also assumed to be a mainspring as a tense relation that appeared between the idea and the reality”. (Habermas, 1990) Journalism with the function of the harmony principle that Liang Qichao practiced seems to consist with that exactly. We can easily find out that harmonizing standard of subjectivity and nature would be the common context between Japan and China in his journalism spirit. There is a possibility that this common context can become a platform of political conversation (macro communications between nations) between Japan and China. Obviously, the matter that Japan had provided a historical arena for Liang Qichao has the vital significance to thaw out the political relation between the two countries in modern ages.

II 審査結果の要旨

博士学位請求論文審査報告

『梁啓超のジャーナリズム精神史研究』

内容

諸論

第一部 梁啓超の初期ジャーナリズム活動

第一章 日清戦争までの清朝帝国の新聞事業概略

第二章 維新派政論紙発行の契機

第二部 梁啓超ジャーナリズム活動の最盛期

第一章 梁啓超の日本亡命「受け皿」

第二章 『清議報』の三年間

第三章 絶望より言論再起

第四章 日露戦争後の予備立憲

第三部 ジャーナリズム活動の終焉に向かって

第一章 政党政治のジャーナリズム

第二章 外交立国ジャーナリズム

第三章 『改造』誌における文化主義への回帰

結論

あとがき

補遺 i 梁啓超の評価問題について

ii 梁啓超の目録学思想について

参考文献リスト

附録Ⅰ 梁啓超年表

附録Ⅱ 日本外交文書に見られる梁啓超に関する記録

附録Ⅲ 『政論』総目録

附録Ⅳ 『改造』誌総目録

分量

本文 213 頁，約 25 万字，付録文書類 111 頁，約 13 万字，合わせて 325 頁，38 万字の論文である。

要 旨

梁啓超（1873—1929）は、清朝末から中華民国の時代にかけてのジャーナリストで、一時、政治活動にも足を踏み入れた。康有爲に師事して、社会改革等の運動に加わり、まず上海で『時務報』を興して、康有爲とともに「変法自強運動」という政治変革の運動に身を投じた。しかし戊戌政変で追われ、日本に亡命、『清議報』『新民叢報』『新小説』などを、次々に創刊して、中国の将来や改革について論陣をはった。日露戦争でのロシアの敗北は、中国人に複雑な波紋を投げかけ、梁啓超は、短命の『政論』、さらに『国風報』を発刊する。中華民国成立で帰国した梁は、一時、司法総長、財政総長など閣僚級の要職につくが、退いて天津等で専ら著述につく。その間も『庸言』『大中華』『改造』と多数のメディアに携わり、また飲氷子の名で出版物、著作を発表した。

とくに、その 14 年間に及ぶ日本亡命時の言論は圧巻である。日本領事館や日本海軍の助けをかりて、天津から日本へ渡り、日本官民の手厚い保護のもと、清朝政界、軍閥、海外知識人向けの雑誌を、日本で次々に発刊する。その活動は一概には言いにくいだが、日中間の懸案事項への独自の姿勢、また中国の体制、意識への改革の働きかけ、日本で学んだジャーナリズムの各種の方法や経験の吸収と中国への移転、日本国内での陸実、宮崎寅蔵らとの交遊

などだ。殊に、日本の知識層が梁啓超と漢文の筆談によって、意見交換をはかり、高いレベルの内容の思想交流を行っていたことを筆者が発掘したことは、注目すべき成果の一つと考えてよい。梁啓超の一生は、中国、日本、北米、ヨーロッパにまたがる活動、そのネットワーク、時に応じた活動のスタイル、歴史とともに変遷する言説など、複雑極まりない。時代の複雑さがそれに輪をかけているとも言える。また、梁啓超の評価は思想家、政治家、運動家のいずれとも言いがたく、ジャーナリストの側面が強かったというのが妥当であろう。

梁啓超が、中国ジャーナリズムの歴史や思想に与えた影響、さらに日中を結ぶ役割について、これまで必ずしも正当な評価が与えられているとは思えない。筆者は、本学の学部生時代、その卒業制作として、徐福の軌跡を取り上げ、修士論文では現代の在日留学生の新聞活動を研究し、今回梁啓超と一貫して日本と中国を結ぶコミュニケーションの結び目に関心を寄せてきた。たまたま2003年、梁啓超の生誕130年を記念する国際シンポジウムが、天津の南開大学で開かれた際、招待講演で陳立新は独自の見解を発表して、注目されることとなった。この会議には、中国、日本、韓国、アメリカ、フランス等の各国、各地から研究者が集まり、これまで埋もれていた梁啓超の発掘と再評価で議論を戦わせた。

筆者は、梁啓超をからめていた政治的束縛を解きほぐし、中国で新たに発掘された文献や、梁啓超に関する一次資料、英文で書かれた研究文献を丹念にフォローしてきた。なによりも筆者の強みは、中、英両語の文献や資料に加えて、日本語による研究文献、梁啓超の記録、さらには、外交文書館における外交文書のフォローである。多くは利用がこれまでなかった。これだけ広く深く文献をフォローできる人は多くない。

また筆者の研究の真骨頂は、ジャーナリズム研究、ジャーナリストとしての梁啓超に的を絞って掘り下げたことである。その結果、梁の多面的な活動、特に中国の文化史研究に心を注ぎ、諸子百家にも似た近代中国の「百科全書派」ともいうべき、広い知識を整理し、中国の読者に与えた活動を明らかにした。

梁啓超は、時流にのるというジャーナリストの一面、思想的には、「百科全書」的な全方向、人脈では平衡を心がけ、政治的に中庸を守るという折衷主義の批判も受けることになる。しかし、ジャーナリストというのはもともとそのような性格であるかも知れず、現実の状況を「論」のなかに取り入れるフレキシビリティを必要とする。自己の体系に忠実な余りドグマティズムに陥りやすい「思想家」とは違うのである。学者でもない、思想家でもない、国家主義者でもない時流に敏感に生き、情報を記事、論説という形で伝え、人々に警鐘、関心、知識、娯楽等を与えるものである。その点でも、梁啓超は、典型的なジャーナリストのひとつのタイプを示している。そしてまた、その後半生は、これらのジャーナリズム活動の中で得た名声、人脈、知識をもとに多数の啓蒙的な書物を著す。それは生活の糧でもあった。これを筆者は、「彼のジャーナリズム精神は、中国の近代化とともに、初期の“器物”中心主義から亡命期の“制度”中心主義へと躍進し、更に“文化”中心主義へと邁進した」と評価

した。

評 価

筆者は、梁啓超という一人の「ジャーナリスト」をキーパーソンに、長い歴史をもつ日本と中国の間の清朝末期から、中華民国の誕生という重要な時期、それはまた日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦や日本の山東半島占領、中国東北部を中心とする鉄道等の利権、上海、天津等の租界での問題、五四運動と、実に重要な歴史的事件の特筆される時期でもあった。梁啓超は、それらのいずれにも言論等がかかわり、両国の政治、外交に大きな影響を残す形で生きた。このような人物、ジャーナリストは、他に見当たらず、実に重要な人物であったというべきであろう。筆者はその活動の全容を浮きぼりにしながらジャーナリズムに焦点をあてた。

中国が、列強の侵略を受け、主要都市に“治外法権”的な各国の租界を設けるといふ情勢の中、梁啓超ら、中国の知識層は大きな困難に直面していた。それに対し孫文らは、日本で調達した武器等で武装蜂起したが、梁啓超は、専ら言論を武器とするジャーナリストの面目躍如の活動をする。しかし、その言論も西太后らの強圧の対象であり、何人ものジャーナリストが暗殺されることになる。梁啓超らは、各国の租界を聖域にしなが、ジャーナリズム活動をしなければならないという苦渋の選択をしていたのである。とくに日本は、ある面では租界での保護や亡命という形で安全を提供し、梁啓超、譚嗣同（これも暗殺）らはそれを受け入れざるをえないという立場であった。

この論文は、多くの優れた側面をもつ。ひとつには、梁啓超を中心にしてではあるが、清国から中華民国に至る中国側の日本にあまり知られていないジャーナリストに光を当てたことである。『時務報』の章太炎、『飲氷室文集』（飲氷子は梁啓超の号）をまとめる何肇一、政聞社の馬相伯、『国民公報』の徐佛蘇、その他、張君勳等々、多数の名が現われる。また、梁啓超と孫文、康有為、袁世凱、宋教仁（上海で暗殺）、麦孟革、馮国璋、胡適、段祺瑞らとの交遊も明らかにしている。

さらにこの多面的内容をもった梁啓超について筆者は、必要な距離をおいて、かなりさめた目で評価しているところに筆者の研究者としての深さと確かさをうかがわせる。「当時の中国知識人の中に、辜鴻銘（1857—1928）」を除いておそらく梁啓超の右に出る情報を持つ者はいなかったと、評しつつも梁啓超が「思想家」と評価されるにはあまりにも「多変」気質であることを見抜いている。梁啓超は、中国の「近代」化へ思いをはせつつ、その言論の中に「老荘文化が充満している」ことも見逃していない。生涯手離さない号「飲氷」自身が、莊子の「朝受命而夕飲氷」からとっている。その多面で、揺れる梁啓超の思想こそ、「近代」中国の苦しみと受け止めたい。

本論文は、ハーバード大の漢学者J. R. レベンソンの研究業績批判から出発している。お

